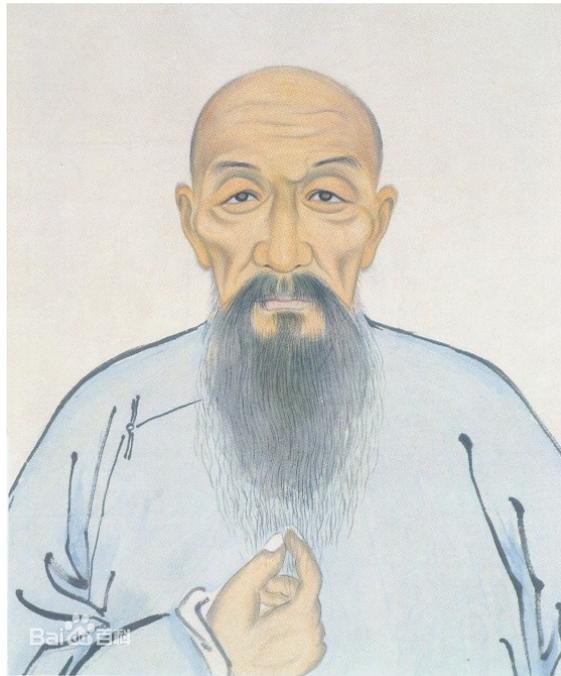


第一章 清朝末から新中国建国まで

第一章では、清朝末期のアヘン戦争以降と辛亥革命後の中華民国政府の時代に、科学技術の分野で活躍した指導者や科学者を取り上げる。

1 曾国藩（1811年～1872年）洋務運動を主導



曾国藩 ©百度

生い立ち

曾国藩は1811年に、湖南省湘郷で農家の長男に生まれた。当時の清朝の皇帝は、乾隆帝の十五男である嘉慶帝である。嘉慶帝は1796年に即位しており、清を大帝国に築き上げた康熙帝（1661年～1722年）、雍正帝（1722年～1735年）、乾隆帝（1735年～1796年）の治世という最盛期が過ぎ、西欧列強の侵略と内乱による衰退が始まろうとしていた時代であった。

曾国藩は、幼い時から勉学に励み、6歳から私塾に入学した。8歳で四書五経を習い、14歳で「周礼」、「史記」などを読んだという。16歳で科挙の前段階試験である童生試に合格し、1838年27歳で科挙の最終最高試験の殿試に合格して、進士の称号を賜った上で軍機大臣に仕えた。

帰郷と太平天国の乱

その後順調に出世を重ね、文官の任免・評定・異動などの人事などを司る吏部の副長官である左侍郎の職にあった1852年41歳の時に母親が死去したため、当時の慣習に従って湖南省に帰郷し喪に服することになった。

曾国藩が帰郷する前年の1851年に、洪秀全を天王としキリスト教の信仰を紐帯とした太平天国の乱が勃発した。清の正規軍たる八旗がその鎮圧に当たったが、建国以来長年にわたる貴族化により弱体化していた八旗は連戦連敗であり、洪秀全率いる反乱軍は曾国藩が帰郷した翌年の1853年3月に南京を陥落させて天京と改名し、太平天国の王朝を立てた。

危機感を抱いた清朝は、中国各地の実力者に対し「郷勇」と呼ばれる臨時の軍隊の徴募を命じ、太平天国の乱の平定に当たらせることとした。喪に服していた曾国藩は、故郷の湖南省一帯で師弟、親戚、親友などの人間関係を頼りに「湘軍」を組織し、太平天国の鎮圧を目指した。

湘軍と太平天国軍との戦いは熾烈であり、戦線は数年にわたり膠着状態となった。曾国藩は1862年に、この局面を打開すべく自らの幕下にあった李鴻章に命じて「淮軍」を設立させた。また、当初中立の立場にあった英国やフランスなどの列強は、アロー戦争の講和条約である1860年の北京条約締結後に清朝に味方することとし、外国人部隊の編成や西洋人将校の下での中国人傭兵を集めた「常勝軍」を編成した。

曾国藩率いる湘軍、李鴻章率いる淮軍、西欧列強の指揮下にあった常勝軍などの猛攻を受け、1863年以降太平天国は無錫・蘇州・杭州を次々に失い、天京（南京）は孤立した。1864年6月、洪秀全は栄養失調により病死し、湘軍の猛攻に遭った天京は翌7月陥落して太平天国は滅亡した。

洋務運動を主導

1861年に恭親王奕訢が開始を宣言したとされる洋務運動は、西欧の近代科学技術を導入して清朝の国力増強を目指した。洋務運動では「中体西用」というスローガンが有名であり、中国の儒教を中心とする伝統的な学問や制度を主体（中体）として、富国強兵の手段として西洋の技術文明を利用すべき（西用）との主張である。曾国藩は洋務運動を主導し、現代にも残る業績を残した。

初期の洋務運動の目的は太平天国の乱を鎮圧することであり、大量の銃砲や軍艦を輸入するだけでなく、西欧の近代軍備を自前で整備することであった。曾国藩は1861年に、弾丸・火薬・銃・蒸気機関などを製造するため安徽省安慶に「安慶内軍械所」を設置した。安慶内軍械所は、西洋からの技術移転なしに設立された最初の軍事工場で、砲弾や武器などを作り太平天国軍との戦争を支えた。

曾国藩は人材の育成にも力を注いだ。1862年に恭親王の建議により、外国語ができる人材の育成を目的として「京師同文館」が設立された。成立当初は、教授全員を外国人宣教師たちに依頼していたが、曾国藩は徐々に優秀な中国人の登用を図り、後述する李善蘭など

を同文館の教授として推薦している。同文館では教育の他、翻訳作業も行い、1873年には出版会を開いた。これは中国で最も早い大学出版会であり、李善蘭らが中心となり数多くの本を翻訳して出版した。京師同文館は1900年に義和団の乱で閉鎖され、1902年に京師大学堂（現在の北京大学）に吸収された。

洋務運動に対する曾国藩のもう一つの重要な貢献は、優れた子供達を米国に派遣することを決断したことである。曾国藩は、後述する容闳が提案した「幼童留美」と呼ばれた中国で初めての海外留学生派遣政策に賛同し、李鴻章とともに清朝政府に強く働きかけ、1872年から同事業を開始させた。

現代中国では、洋務運動に対する見方は非常に厳しい。とりわけ日清戦争の黄海海戦や威海衛の戦いにおいて、洋務運動の華ともいべき北洋艦隊が日本の連合艦隊に惨敗したことから、技術的な面のみを取り込んで旧弊な政治制度・軍制を守ろうとし、合理主義などの西欧流の近代思想を取り込むことに失敗したと評価される。

晩年

太平天国の乱の平定に活躍し、洋務運動を主導した曾国藩であったが、晩年にはその栄光に陰りも見られた。1865年、太平天国の乱と同時期に清に反抗した華北の武装勢力である捻軍の討伐を命じられたが、成果を挙げられず1866年に李鴻章に交代させられている。また、1870年に天津で発生したキリスト教排撃運動（天津教案）の処理を任せられ、フランスなどと交渉の結果、賠償金の支払いと謝罪により戦争を回避したものの、朝廷と民衆はこの対処に不満を抱き、曾国藩の名声は大いに傷ついた。

曾国藩は1872年に、南京で散歩中脳溢血となり、60歳で死去した。後日遺骸は湖南省の長沙に移送され、葬られた。

従来中国では曾国藩の人気は高くない。漢民族出身の洪秀全が異民族である満州族の帝国である清を滅ぼそうとしたのに、漢民族の出である曾国藩がこれを鎮圧したことにも由来すると言われている。しかし、曾国藩はすでに述べたとおり科学技術や高等教育での貢献は大きなものであった。

何よりも大変優れた人格の持ち主であったと考えられ、その証左として曾国藩が座右の銘としたと言われている「四耐四不訣」を紹介したい。四耐四不訣とは、「耐冷、耐苦、耐煩、耐閑、不激、不躁、不競、不随、以成事」であり、「冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑に耐え、激せず、躁がず、競わず、随わず、以て大事を成すべし」と読み下すものである。「訣」という語は、秘伝や秘訣などを意味する。

2 李善蘭（1811年～1882年）数学者、翻訳家

生い立ちと教育

李善蘭（りぜんらん李善兰）は、前述した曾國藩と同じ1811年に、浙江省海寧（現在の嘉興市）に生まれた。

李善蘭は、幼少期から読書好きであり私塾に通って勉強を始めた。9歳の時に、中国古代の算術の名著『九章算術』を父の本棚で発見し、数学に夢中になった。『九章算術』は紀元前に書かれ、その後色々な数学者が加筆修正して現在に伝わっている名著である。さらに14歳の時、独学で『幾何原本』全6巻を読破し、数学の造詣をさらに高めた。『幾何原本』は、古代ギリシャのユークリッドが編纂した『ストイケア：原論』前半部を、明代の科学者徐光啓とイエズス会の宣教師マテオリッチ（利瑪竇）が共同で1606年に漢訳したものである。

青年となった李善蘭は、科擧の地方試験・郷試を受けたが、残念ながら失敗してしまった。しかし、受験のために滞在した杭州で、李冶の『測円海鏡』や戴震の『勾股割円記』といった数学の古典を買い求め、数学の知識をさらに高めていった。その後、引き続き科擧に合格することを目指して同様の志を持つ故郷の仲間とともに漢詩などの勉学に励んでいたが、これに併せて数学的な素養も磨き、例えば夜間に星の観測を行ったり、比例の原理を用いて近くの山の高さを推定したりした。



李善蘭 ©百度

墨海書館で翻訳に従事

1840年にアヘン戦争が勃発すると、李善蘭は帝国主義的な西欧列強に激しく反発し、科学の力で中国を救済しようと決心した。その後、江蘇省や浙江省に在住していた在野の数学者と交流を開始して数学的な才能を強化し、35歳となった1846年に自らの数学の研究成果に基づき『方圓蘭幽』など3つの著作を刊行した。

1852年に李善蘭は、自らの研究成果を西洋人に評価してもらうため、上海にあって西欧の文献を翻訳出版していた「墨海書館」を訪問した。墨海書館は、1843年に英国の宣教師が創立し、上海で一番早く活字印刷術を導入した近代的出版社で、1863年まで20年間活動した。活版設備の印刷機は鉄製で、ベルトで結ばれた別室には牛がいて、牛を動力源としていたという。李善蘭は、当時墨海書館にいた英国人宣教師アレクサンダー・ワイリーと会って自らの数学的著作を見せたところ、ワイリーはこれらの著作を高く評価し、同書館で働くことを強く勧めた。

ワイリーの勧めに同意した李善蘭は、その後墨海書館内に住み、ワイリーと共同でユークリッドの『ストイケア：原論』後半部を『幾何原本』9巻に漢訳したのを手始めに、『代数学』13巻、『代微積拾級』18巻、『植物学』8巻などを翻訳した。また李善蘭らは、ニュートンの『自然哲学の数学的諸原理：プリンキピア』の翻訳にも挑んだが、残念ながら達成できなかった。

京師同文館へ

1862年、李善蘭は曾国藩の幕に入り、科学顧問的な役割を果たすとともに、同じ曾国藩の幕にあった化学者の徐寿（後述する）らと交流を持った。曾国藩は、李善蘭の求めに応じてユークリッド幾何学の翻訳本『幾何原本』の出版費用を援助している。

京師同文館は1862年に、外国語ができる人材の育成を目的として北京に設立されたが、教師の中心は外国人の宣教師たちであった。その後、天文演算学館（天文数学科）の増設に合わせ、曾国藩が李善蘭を京師同文館に招聘し、李善蘭は同文館の教師となった。

李善蘭が京師同文館で教鞭を取っていた1868年から1882年までの間は、外国の侵略や内部の反乱が続いた清末では、まれに見る平和な時代であった。とりわけ、西太后を母とする同治帝（在位期間1861年～1875年）の時代は、アロー戦争の敗北、太平天国や捻軍の反乱の鎮定の後に比較的安定が続いた時期で、「同治の中興」と呼ばれている。李善蘭は約15年間にわたって京師同文館で数学の教鞭を取り、育てた科学者・数学者は約百人余りに達し、その後の中国の近代科学、特に数学の知識を広める上で重要な役割を果たした。

数学の業績

李善蘭の数学研究の業績としては、円錐曲線論、等差級数、素数論の3つが有名である。

李善蘭は翻訳にあたって多くの数学に関する名詞を発明した。具体的には「代数」、「変数」、「函数」、「係数」、「微分」、「相似」などで、李善蘭の多くの訳書が日本に持ち込まれたことにより、これらの用語は現在でも日本で使われている。また、現在でも使用されている数学記号の $=$ 、 \times 、 \div 、 $<$ 、 $>$ は、李善蘭が最初に訳書に使用している。数学以外にも「植物」などの訳語を創作している。

李善蘭は、1882年に71歳で死去した。

3 徐寿（1818年～1884年）蒸気船の開発



徐寿 ©百度

生い立ちと教育

徐寿は、1818年に江蘇省無錫の農家に生まれた。父は徐寿が4歳の時に亡くなり、母が徐寿を育てていたが、その母も徐寿が17歳の時に亡くなってしまった。当時は早熟早婚のため、母が亡くなった時徐寿はすでに結婚しており、子供が1人いた。家族を養うため、農業に従事しながら商売をしたり上海に出かけたりしつつ、知識欲を満たすために読書に励んだ。しかし、単なる詩文や四書五経の読書では実際の生活にほとんど役に立たないと痛感し、より実用的な学問を目指した。

当時の無錫では手工業が盛んであり、徐寿もその影響で小さいときから自らの手でいろいろなものを作るのが好きであった。青年期に達してからは、ものを作ることだけではなく、動作原理などを探求するための読書にも関心を示し、中国の古典や西欧科学技術の翻

訳を通じて、数学、天文暦、物理、医学などに興味を持った。

盟友・華蘅芳との出会い

清朝衰退の要因であるアヘン戦争が開始されたのは、徐寿が 22 歳となった 1840 年であり、1842 年には清朝が敗北して南京条約を締結している。さらに太平天国の乱が始まったのが 1851 年である。これらの出来事に遭遇し、徐寿は自国の行く末に心を痛め、科学技術での立て直しを誓う。このころ徐寿は華蘅芳（かこうほう 华蘅芳）という優れた友人を得た。華蘅芳は 1833 年にやはり江蘇省無錫に生まれており、徐寿の 15 歳年下である。数学好きの父親の影響を受け、華蘅芳は 10 歳から中国の数学書を学習した。



華蘅芳 ©百度

徐寿は、華蘅芳と一緒に中国古典や翻訳書を勉強し、また機械模型などの製作も一緒に行った。1853 年、徐寿（35 歳）と華蘅芳（20 歳）は連れだって上海の墨海書館を訪問し、同書館で翻訳・出版した西洋の近代物理、動植物、鉱物学などの書籍を購入するとともに、すでに述べた李善蘭（当時 42 歳）と知り合いとなった。徐寿と華蘅芳は無錫に帰った後、これらの翻訳書で得た知識を元にした実験に没頭し、プリズム的なものを自作して光の分光実験を行ったり、摩擦による静電気の発生実験を行ったりした。2 人は、1856 年にも連れだって墨海書館を訪問し、翻訳書や実験のための器具や薬品を購入している。

蒸気船の製造

曾国藩はすでに記述したとおり、安慶内軍械所を 1861 年に設置し、積極的に中国人科学者・技術者を登用した。徐寿と華蘅芳も、曾国藩の求めに応じて安慶内軍械所で働くこととなった。徐寿は、次男の徐建寅（1845 年生まれで当時 16 歳）も同行させた。

徐寿らは、英国やフランスなどの軍艦が中国国内の河川を自由に航行する様子を見て、自分たちも外国船のような蒸気船を製造したいと考え、まず蒸気船の動力である蒸気機関の自作に取りかかる。翻訳書や近くの長江に停泊する外国船を外から観察したりして情報を集め、3 か月かけて 1862 年 7 月に中国初の蒸気機関を製作した。

この成功に大いに喜んだ曾国藩は、徐寿らに蒸気船を自作するように命じ、1863 年から徐寿は華蘅芳や次男の徐建寅らと蒸気船の製造に取りかかった。1864 年には太平天国の乱がようやく平定され、安慶内軍械所は「南京金陵機器製造局」となって南京に移転した。徐寿らも南京に移動して引き続き蒸気船の開発を進め、ついに中国初の蒸気船「黄鹄」を完成させ、1866 年 4 月に曾国藩を招いて記念式典を挙行している。

1866 年末に、より大規模な軍需施設である「江南機器製造総局」が上海に設置されると、徐寿、徐建寅親子と華蘅芳は上海に向かい、「恵吉」、「操江」、「測海」、「澄慶」、「御遠」などの設計・製造を指揮し、中国近代造船工業の新たな局面を切り開いた。

ちなみに、日本の幕末期の蒸気船開発をたどると、オランダの翻訳書などを元に日本で初めて蒸気機関を開発したのは島津齐彬率いる薩摩藩であり、その時期は 1855 年で徐寿の開発より 7 年早い。また薩摩藩は、開発した蒸気機関をその年のうちに既存の船に搭載し、日本初の蒸気船「雲行丸」を完成している。これも徐寿らの「黄鹄」の完成の 11 年前となる。ただし、「雲行丸」の技術的な完成度は低く、小舟並みの推力しかなかったという。実用的な蒸気船の開発は、鍋島直正の佐賀藩が 1865 年に製造した「凌風丸」が最初と言われている。つまり、清と日本はほぼ同時期に実用的な蒸気船を自力開発したことになる。

翻訳所と格致書院の設置

一連の蒸気機関や蒸気船の製造において、西欧の科学技術の習得が不可避であることを改めて認識した徐寿は、1868 年に上海の江南機器製造総局内に翻訳館を設立し、西欧の科学関係の書籍の翻訳に従事する。徐寿は、主として 1870 年代から 80 年代の化学関係の書籍を体系的に選択し、英国人宣教師のジョン・フライヤー（傅蘭雅）とともに 17 年の間に『化学鑑原』（1871 年刊）、『化学考質』（1883 年刊）、『化学求数』（1883 年刊）などを次々と出版していった。翻訳の中で徐寿は、英語の化学元素の第一音を漢字に訳しそれを同元素の漢訳名とした。例えば、金属元素の命名には、金へんを使いそれにこの元素の英語読みの一音を付ける形で、新しい漢字を作成した。鈉（ナトリウム）、鋅（亜鉛）、鎂（マグネシウム）などである。

科学技術の知識を伝授するために、徐寿らは中国で初めて科学技術の知識を教える場所として、上海に「格致書院」を創立した。1879 年に正式に学生の募集を開始し、鉱物、電

気、測量、土木・建設、蒸気機関、製造などの授業を行った。徐寿はまた、中国初の科学技術誌『格致彙編』を創刊した。同誌は7年間出版され、多くの西洋の科学技術知識を紹介し、近代科学技術の普及に重要な役割を果たした。

1884年に徐寿は病に倒れ、66歳で亡くなった。

なお、徐寿の次男である徐建寅は、父徐寿の生存中はずっと父に付き従って父の補佐をした。父の死後は火薬の開発に心血を注ぎ、1900年に中国初の無煙火薬の製造に貢献したが、1901年には火薬製造中の事故で亡くなっている。

享年56歳であり、親子二代で機械や化学の研究開発に殉じた生涯であった。



徐建寅 ©百度

一方盟友の華蘅芳は、上海の江南機器製造総局内の翻訳館で翻訳を担当し、また格致書院で数学などを教えた。晩年は教育活動が中心となり、上海の格致書院だけでなく、天津武備学堂、湖北兩湖書院（武昌）、江陰南菁書院（無錫）などで教鞭を執り、1902年に69歳で亡くなっている。

4 容闈（1828年～1912年）幼童留美政策

生い立ちと教育

容闈（ようこう容闈）は、1828年に広東省香山県の農家に生まれた。香山県は現在の珠海市であり、南にマカオが隣接している。海を挟んで東側には香港島が存在する。広東省の省都である広州市は、約150キロメートル北に位置している。

1835年、7歳となった容閑は父親に従ってマカオに行き、キリスト教宣教師夫人が運営する学校に入学した。アヘン戦争の結果香港が英国に割譲されたのを機に、容閑の学んでいた学校が香港に移転したため、容閑も香港に移動した。1847年、容閑の学んでいた学校の校長サミュエル・ブラウン牧師が、病気となった夫人とともに米国に帰国することになり、容閑ら生徒3人を同行させることとした。米国に到着した容閑らは、マサチューセッツ州の大学予備校（ウィルブラハム・モンソン・アカデミー）に入学した。



容閑 ©百度

容閑らを同行させたブラウン牧師は、日本とも関係が深い。ブラウン牧師は、マカオから帰国した後、今度は日本でのキリスト教布教のため1859年に来日している。そして、聖書の和訳やキリスト教団の発展に尽力するとともに、ヘボン式ローマ字の考案者として有名なジェームス・カーティス・ヘボンらとともに英語教育にも携わり、明治学院の基礎を築いている。

洋務運動への貢献

容閑は1850年に、ウィルブラハム・モンソン・アカデミーを卒業し、コネチカット州にあるイエール大学に入学した。1854年には同大学を無事に卒業し、文学士の学位を取得している。この間、キリスト教に入信するとともに、米国国籍を取得した。

イエール大学を卒業後は中国に帰国し、在広州米国公使館や上海税関などの通訳などの業務に就くとともに、絹糸やお茶の国際的な売買などに携わった。

当時中国大陸は、清と太平天国が共存する形となっており、容閔は太平天国が中国の近代化のきっかけとなると考えて、1860年に太平天国の都のあった天京（南京）に赴いて軍備や教育制度に関する提案を太平天国の幹部に提出するも、容れられなかった。

1863年、今度は李善蘭の紹介で、曾国藩に謁見する機会を持った。容閔は翌1864年に、曾国藩の命を受けて米国に赴き、中国国内の武器製造所で用いる様々な機械を購入し持ち帰った。この機械購入の成功により、容閔は曾国藩の信頼を得ることとなった。

幼童留美政策の立案・実施

容閔は、その後要人の通訳などの仕事をしていたが、中国の子供達を米国に留学させ、将来の中国を背負って立つ人材に育てる計画を思い立ち、1870年に曾国藩にその旨を提案した。曾国藩は李鴻章と相談し、1872年から「幼童留美」と呼ばれた中国初めての海外留学生派遣政策を実施させることとした。この政策は、上海、福建、広東など中国の沿岸地域の10歳から16歳までの少年（幼童）を毎年30名選抜し、米国（中国語で美国）に留学させて（留美）軍事や船政を習得させた後、中国に帰国させるという壮大な計画であった。そして容閔は、在米公使館の副公使として米国に滞在することになった。



第1回幼童留美の少年たち ©百度

幼童留美政策は当初順調に推移し、1872年から4年間に毎年30人ずつ全体で120人の少年が米国留学に出発した。米国では、全ての少年が米国人家庭でホームステイし英語の習得に励んだ後、高等教育に進んだ。1881年時点で、22名がイエール大学、8名がマサチ

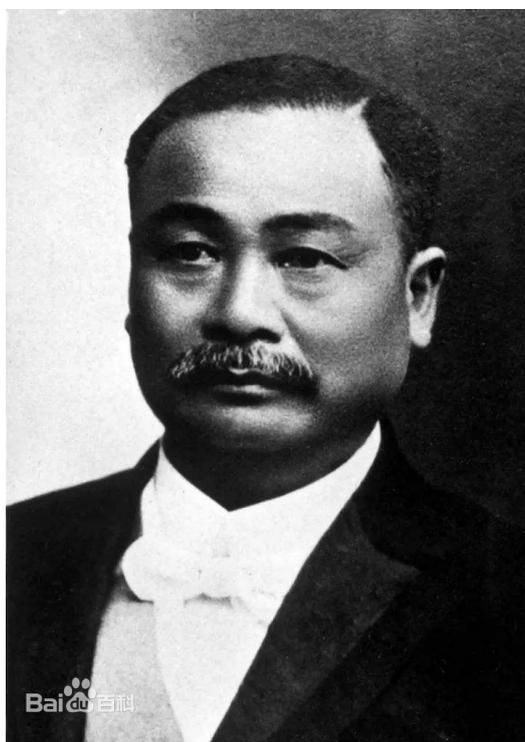
ューセツ工科大学 (MIT)、3 名がコロンビア大学、2 名がハーバード大学に進んだという。ところが、留学生の中からキリスト教徒となるものが出たり、米国の軍関係の学校がこれらの留学生の受け入れを拒否し最終目的の軍事や船政の習得が困難となったりしたことから、1881 年に清朝政府は幼童留美政策を中断し留学生全員に帰国命令を発した。容閔は失意のうちに留学生と一緒に帰国した。

戊戌の変法と辛亥革命

容閔は、幼童留美政策中断への失望から再び米国に渡航したが、日清戦争で清が敗北したことを強く憂えて北京に帰国した。しかし、1898 年に光緒帝により開始された戊戌の変法に関与するも失敗したため、北京を脱出し香港に逃れた。

その後、孫文の知己を得て、革命運動を米国から支援した。1911 年末に辛亥革命が成功し、孫文が臨時政府の大総統に就くと容閔に帰国を促す手紙を送ったが、容閔は病床にあり帰国はかなわず、1912 年 4 月コネチカット州ハートフォードで 83 歳の生涯を閉じた。

5 詹天佑 (1861 年～1919 年) 中国鉄道の父



詹天佑 ©百度

生い立ちと教育

詹天佑^{せんてんゆう}は、1861年に広東省南海（現在の広州市）に生まれた。父親は、代筆をしたり、印鑑を彫ったりして生計を立てていた。小さい頃から近くの私塾に通って勉学に励んだ。

詹天佑は、幼童留美政策の第1回留学生選抜試験に合格し、11歳となった1872年に、他の同輩とともに総勢30名で米国に渡った。米国に到着後の1873年には、コネチカット州ウェストヘーブン小学校に入学し、同校校長であったL・H・ノースロップ家にホームステイした。詹天佑は1878年に、イエール大学シェフィールド理工学院土木工学科に入学し、1881年に卒業した。卒業論文のテーマは「埠頭のクレーン研究」であった。

卒業後もイエール大学での研究続行を望んだが、母国の清政府が幼童留美政策による留学生の早期撤退を命じたため、やむなく詹天佑は帰国した。この時点で米国の大学を卒業していたのは、後に外交官となった欧陽庚と詹天佑の2名だけであった。

中国鉄路会社に就職

1881年に帰国後は、福建省の福州船政局で軍艦操縦の実習などを行った後、同船政局に付置されていた福州船政学堂の後学堂で英語を教えた。さらに1884年には、広東省広州市に設置された広東博学館（後に広東水陸師学堂と改名）に移り、やはり英語を教えた。

1888年、27歳となった詹天佑は、李鴻章らが天津に設立した中国鉄路会社に職を得て、英国人技師のクロード・ウィリアム・キンダーの下で、見習い技術者として鉄道技術を学んだ。キンダーは、ロシアのサンクトペテルブルクで鉄道工学を学び、1873年に父親がいた日本に渡り、明治政府の工部省鉄道寮のお雇い外国人技術者となった。ところが1878年に西南戦争が起こったため、キンダーは中国の上海に渡り、その後中国鉄路公司以て技術者となった。

キンダーの父親のトーマス・ウィリアム・キンダー（当時はキンデルとも呼んでいた）は、明治時代の1871年に大阪の造幣局が出来た際、トップの造幣首長に任命されている。父キンダーは大英帝国の元少佐であり、香港造幣局長も務め日本の造幣局の基盤を築いた人物ではあるが、気位が高くかつ激しい気性の持ち主であったため明治政府の井上馨らと折り合いが良くなく、1875年には造幣首長を退任している。

津榆鉄路、津盧鉄路などの工事を担当

詹天佑は、唐山から天津に至る唐津鉄路の建設に携わり、その時の仕事ぶりから上司のキンダーに認められ、ほどなく正規の技術者に昇任した。

1890年、中国鉄路公司是天津から山海関に至る津榆鉄路の建設を開始した。津榆鉄路では灤河^{らんが}（河北省と内モンゴル自治区に流域がまたがり、渤海へと流入する大河）に橋梁を架ける必要があったが、渾河に杭を打つ作業が難航して、英国人技師らの努力もむなしく鉄路建設工事が進まなかった。

そこで、詹天佑が橋梁建設工事の責任者となり、中国人作業員だけで気圧潜函法を用いて橋脚を作り、最終的に 1894 年に橋梁を架けることに成功した。全長 640 メートルに及ぶ鋼鉄製の橋梁で、当時の中国最長のものであった。この功績により詹天佑は、英国土木技術師学会の会員に中国人として初めて推挙されている。

中国における鉄道建設の第一人者となった詹天佑は、その後津盧^{しんろ}鐵路や欽州鐵路などの建設を担った。

京張鐵路の建設

詹天佑は 1905 年に、北京から張家口に至る京張鐵路建設の主任技師を任された。この鐵路の敷設予定地は戦略的な要衝であり、中国の植民地支配拡大を狙う英国、ロシアなどが敷設権を得ようとして、予備調査を繰り返していた。しかし、同鐵路の途中にある燕山山脈には非常に険しい峰が多くあり、その峰の一部は花崗岩や玄武岩で構成されており、当時一般的に使用されていた発破工法を実施することが難しいとして、工事不可能という調査結果が出ていた。このため清側の責任者であった袁世凱は、外国の資金を使用せず外国人を使わないと決定し、京張鐵路全部を中国人だけにより建設することとした。

主任技師となった詹天佑は、この建設工事は中国人技術者の名声と榮譽に関わると考え、自ら測量を行い 3 本の計画路線を選定し、さらにその中で建設費用の最も安い路線を建設対象とした。京張鐵路には 4 つのトンネルが設置され、中でも八達嶺トンネルは長さが 1,092 メートルであり、詹天佑はこの難工事を立杭工法により掘削した。また、八達嶺の断崖絶壁にはスイッチバックを設置し、地形の問題も解決した。

京張鐵路は、4 年の歳月をかけ 1909 年に無事完成した。予定の工事期間を 2 年間も短縮し、建設費用も節約することができた。京張鐵路の建設の成功は、中国の近代鉄道工事史の重要な業績となった。

詹天佑は京張鐵路の建設期間中、各種の鉄道工事規格を改定し、その規格を全国で採用するよう政府に意見書を提出した。中国が現在でも使用している軌間 1,435 ミリメートルの標準軌の採用、米国人鉄道技師のイーライ・ジャニーが 1873 年に発明した自動連結器の導入などは、詹天佑が提議したものである。

そのほか、詹天佑は鉄道人材の訓練育成に力を入れ、技術師昇進規定を制定し、工事者に対する評定や要求を明文化した。また、技術師の報酬と評定成績は連動すると定めた。京張鐵路は多くの中国技術師を訓練育成し、詹天佑が制定した評定・規定は他の中国鉄道の規範となった。

京張鐵路の建設後、詹天佑は宣統帝から工科進士を賜り、留学生主任試験官などの職に就いた。辛亥革命の後、1913 年に新政府の交通部技監に任命され、1916 年には香港大学から榮譽法学博士号を与えられた。1919 年にはウラジオストクとハルビンで開催される遠東鐵路会議の中国代表に任命されたが、病を得て住居のある湖北省漢口（現在の武漢市の一部）に戻り、同年 4 月に没した。享年 57 歳であった。

詹天佑は「中国鉄道の父」と言われ、中国土木工学界の最高賞である「中国土木工程詹天佑賞」にその名が残されている。

6 蔡元培（1868 年～1940 年）北京大学と中央研究院の基礎を築く



蔡元培 ©百度

生い立ちと清朝政府への出仕

蔡元培は、1868 年に浙江省紹興で生まれた。4 歳で私塾に入り、1884 年の 16 歳から科挙への挑戦を始め、1894 年、26 歳の時に清朝の官吏に任ぜられた。しかし戊戌の変法が失敗に終わったため、蔡元培は 1898 年に、故郷の紹興に帰って中学校の教員となった。

その後蔡元培は、武装蜂起により清朝の転覆を画策する革命活動に参加し、青島、日本、紹興、上海などを転々としたが、1907 年 39 歳の時に、当時の駐ドイツ公使の援助でベルリンを経由してライプツィヒ大学に行き、心理学、美学、哲学などの講義を聴講するとともに、『中国倫理学史』などの学術書を編纂した。

辛亥革命の成功と北京大学学長就任

1911 年、辛亥革命成功の報を聞いた蔡元培は、4 年間のドイツ滞在を終えてシベリア経

由で帰国し、翌年 1 月に南京で設立された中華民国臨時政府の教育総長（教育大臣）に就任した。しかし、その後政治の実権が独裁的な袁世凱に移ったことから教育総長の職を辞し、1913 年、今度はフランスに行き、フランスで学術研究に従事し、多くの哲学書や美学書を編纂した。フランス滞在中には華法教育会（華は中国、法はフランス）を組織し、中国人の若者をフランスに呼び寄せ勤労しながら勉学する（勤工儉学）制度を提唱した。周恩来や鄧小平などは、この勤工儉学制度によりフランスに留学した。

1916 年に袁世凱が死去し、亡命していた孫文らが帰国することになり、蔡元培も同年末に帰国し、北京大学の学長に就任した。蔡元培は、陳独秀、李大釗、胡適らの著名文化人を北京大学教授として招聘した。陳独秀と李大釗は中国共産党の基礎を築いた人物であり、胡適はノーベル文学賞にノミネートされた文人である。さらに蔡元培は、その後も地質学者の李四光や日本に留学していた文学者魯迅を招くとともに、先進的な学者だけではなく清朝滅亡後も辮髪を押し通す学者なども等しく北京大学の教授として遇した。このように蔡元培は、学術研究の発展と自由思想の校風を確立するため、大学内での思想の自由の原則を徹底させ、あらゆる学派を自由に競争させようとした。蔡元培は女性の権利拡張に関しても積極的であり、1920 年 2 月に 3 人の女子学生を北京大学の文系講義で傍聴させるよう命じ、その年の秋から正式に女子学生の募集を開始させた。

五・四運動

第 1 次世界大戦終了後に開催されたパリ講和会議においてヴェルサイユ条約が決議され、山東半島でドイツが所有していた権益を日本が確保することとなった。1919 年 5 月 4 日、ヴェルサイユ条約の内容とそれに対する政権の対応に強く反発した北京大学の学生は、当時紫禁城の裏手にあった北京大学講堂（紅樓）に集合した。そこから天安門広場に行き他の大学生らと合流し、天安門広場で抗議集会を開いた後、ヴェルサイユ条約反対や親日派要人の罷免などを要求し、数千人の規模でデモ行進をした。デモ隊はさらに親日派要人を襲撃して重傷を負わせたり、自宅に放火したりして、暴徒化した。これがいわゆる「五・四運動」である。

政府は北京大学の学生らを多数逮捕し事態の収拾に努めたが、学生側はゼネラル・ストライキを敢行し、亡国の危機と反帝国主義を訴えた。運動は全国的な反日・反帝運動に発展し、各地の学生もこれに呼応した。さらに、労働者によるストライキも全国的な広がりを見せ、同年 6 月 10 日には政府が逮捕した学生を釈放せざるをえなくなった。6 月 28 日に中国政府は、ヴェルサイユ条約調印を最終的に拒否した。

蔡元培を五・四運動の黒幕とらんだ政府は、学長の罷免や北京大学の廃校の検討を開始したため、蔡元培は大学と学生の安全を守るため自ら学長の辞任を表明した。しかしその後、学生や教職員の政府に対する強い働きかけで学長職を継続している。

大学が抗日、反日の最初の大きな発火点となったことに、北京大学は強い誇りを持っている。現在の北京大学の創立記念日は 5 月 4 日である。これは、1949 年に中国共産党が国

共内戦に勝利して北京大学に進駐後、北京大学が五・四運動で果たした役割に鑑み、同年5月4日に中国共産党北京大学指導委員会を設置したことに由来している。



五・四運動の発火点となった红楼

中央研究院院長に就任

1923年、時の政府と再度衝突した蔡元培は、北京大学学長の辞職願を提出しヨーロッパに渡るも、3年後には中国に帰国し、南京国民政府で大学院院長、司法部長、監察院長などの職に就いた。1927年11月、国民政府は、近代的な科学技術や学術研究の重要性を認識し、国の最高研究機関として「中央研究院」を政府直属で設立することとし、傘下に物理、化学、工学、地質、天文、気象、動物、植物など14研究所を設置することを決定した。蔡元培は、この中央研究院の初代院長に就任し、同研究院の基礎固めを行った。中央研究院は新中国建国後、北京で別途設置されていた北平研究院と一緒に接收され、中国科学院の基礎となった。

1937年、北京郊外において盧溝橋事件が起こり、日中戦争が勃発した。日中戦争は当初日本軍優位に進み、日本軍は上海、南京など多数の都市を占領し、国民政府の首都は南京から西部の重慶に移転された。このため、中央研究院も戦火を逃れて中国大陸の西にある昆明、桂林、重慶等へ疎開することとなり、蔡元培はその指揮を取った。

日中戦争中の1940年3月、蔡元培は香港で死去している。享年72歳であった。

7 鐘觀光（1868年～1940年）近代植物学の開拓者

生い立ちと教育

鐘觀光（钟观光）は、1868年に現在の浙江省寧波市に生まれた。小さい頃から勉学に励

み、19歳で科挙の秀才の資格を得た。鐘觀光の勤勉な勉学姿勢を示す逸話として、「縛脚秀才」という言葉が残っている。幼い鐘觀光が、自らの足がぶらぶらして勉学の妨げになることを嫌って座っている椅子に足をくくりつけていたことから、近所の人にからかいを込めて言われたものである。しかし、清朝政府の腐敗によって戊戌の変法が失敗したことに憤り、科挙に合格して清朝の官吏となることを断念し、科学の道での救国を志した。



鐘觀光 ©百度

自然科学の知識不足を補うために、鐘觀光は1899年に同郷の親友らとともに科学研究のための結社「四明実学会」を創設し、理化学知識の獲得に努めた。鐘觀光らは、すでに取り上げた徐寿らが設立した上海の江南機器製造総局翻訳館で書籍を購入し、その内容に基づいて理科の実験を行った。酸性の物質を用いる実験なども行ったため、飛び散った酸性の液により衣服に穴があいて、周りの嘲笑を買うこともあったという。

当時は日清戦争後で、西洋の科学技術を消化した日本を見習うべきとの風潮から、鐘觀光は日本語を独学し日本の理化学書を購入して研究した。その甲斐あって、1900年に上海の浦東にリンを製造する靈光造燐工場を建設し、政府より15年間の特許権を得た。また、翌1901年に上海に科学機械館を設置したり、1903年に科学啓発雑誌「科学世界」を創刊したりしている。その間、鐘觀光は日本を訪問し、日本の教育と実業を視察するとともに、蔡元培の知己を得た。

植物学への傾倒

1905年鐘觀光は肺を患い、上海を離れて浙江省杭州の西湖で病氣療養した。西湖湖畔は四季を通じて草花が豊かに咲き誇る場所であり、鐘觀光は植物学の研究に深い興味を持

ち、病床で李善蘭らが翻訳した『植物学』などを読むとともに、病気が快方に向かった後も野外で標本を採集した

1911年に辛亥革命が起き、旧知の蔡元培が新政府の教育部長となると、鐘觀光も教育部参事として政府に招聘された。新政府にいる間、鐘觀光は南京や北京の野山を歩き回り、植物採集に没頭した。しかし新政府内で政変があったため、鐘觀光は蔡元培とともに下野し、湖南省長沙で師範学校の教師となった。この時期の鐘觀光の植物採取活動はすさまじいものであり、福建、広東、広西、雲南、浙江、安徽、湖北、四川、河南、山西、河北など11の省区、さらには長江、黄河、珠江の3大流域を旅して、約15万種にわたる植物の標本を採取した。

50歳となった1918年に、鐘觀光は北京大学で植物学担当の副教授となった。1924年自分で採集した標本をもとに、北京大学に植物標本室を設置した。北京大学の標本は採取地域の広大さや種類の豊富さなどの特徴を有し、現在でも生態分布を研究するための最適なものであると言われている。

鐘觀光は1927年に、北京大学を辞して浙江省杭州の浙江大学に移り、同大学農学部の副教授兼西湖博物館自然部主任となった。浙江大学でも、植物標本室を設置するとともに植物園を設立した。

晩年

3年後の1930年には浙江大学を辞して、北京の北平研究院植物学研究所の専任研究員となった。すでに還暦を過ぎ62歳となっていたが、植物学への情熱は消えず、植物学の古典を考証して近代的な科学の視点で植物学の著作を行ったり、明の李時珍が1596年に刊行した漢方植物の古典である『本草綱目』に関して54科目、199種類の植物を考証したりした。

1937年に日中戦争で日本軍が北京を占領したため、鐘觀光は書きかけの原稿などを持って北京を逃れ、徒歩で故郷の浙江省寧波まで戻った。北京に残した植物標本は、その後の混乱のため多くが散逸してしまった。さらに1940年7月には、日本軍が寧波に上陸し占領されてしまう。鐘觀光は、この日本軍占領の中で、同年9月に72歳で亡くなっている。

牧野富太郎との共通点

鐘觀光は、大学を出ておらず、米国等への留学経験もない。このため、奉職した大学などでの地位も低く、高齢になるまで植物学での功績が認められなかった。しかし、膨大な標本採取や多くの著作などに見られるように植物採集にかける情熱は熱く、近代中国の植物学の開拓と発展に大きな貢献をしている。

日本でも、小学校中退ではあるものの一生涯をかけて日本の植物相の観察研究に没頭した学者に牧野富太郎がいる。牧野富太郎も、学歴がないが故に東京大学などの学者仲間には軽んじられ、助手や講師にしか就くことが出来なかった。それでも、牧野は理学博士号を取

得し、94歳で死去した際には学者としての最高榮譽である文化勲章を追贈されている。処遇などは少し違うが、鐘觀光は日本の牧野富太郎のような存在であろう。

8 伍連徳（1879年～1960年）ノーベル生理学・医学賞にノミネート



伍連徳 ©百度

生い立ちと教育

伍連徳（伍連徳、Wu Lien-teh）は1879年に、英国の海峡植民地マラヤのペナンで、広東省出身の華僑・伍祺学の子として生まれた。ペナンは、マラッカ海峡に位置する交通の要衝であり、現在はマレーシアの都市となっている。

伍連徳は7歳で、現地のアジア人子弟の教育を目的に英国国教会の寄付を得て1816年に設立された「ペナン自由学校（Penang Free School）」に入り、10年間英語などの基礎教育を受けた。

1896年に、伍連徳は英国女王陛下の奨学金を得て、ケンブリッジ大学エマニュエル・カレッジに入学した後、1909年にロンドン市内パディントンにあるセントメアリーズ病院に入り基礎医学を学び、インターンとして臨床も行った。同病院での3年間の勤務の後、1902年に伍連徳はケンブリッジ大学から医学学士号を取得した。その後、リバプール熱帯医学校、ドイツ・ハレ大学、フランス・パスツール研究所などで臨床や基礎医学の経験を積み、1903年に破傷風菌に関する研究でケンブリッジ大学より医学博士号を取得した。

マレー半島に戻ったのち中国に赴き満州の肺ペストに対処

医学博士号を取得した伍連徳は、マラヤに戻りクアラルンプールで1年間マラリアなどの研究をした後、1904年に故郷のペナンに戻って華僑のためのクリニックを開設した。

当時の中国は清朝末期であり、この時期に政治の実権を握った袁世凱は、伍連徳の医学者・臨床医としての高い評判を聞いて、天津に設置された陸軍軍医学校の副校長への就任を要請した。伍連徳は袁世凱の要請を受け入れ、1908年に父の祖国である中国に赴き、以降数十年にわたって中国で活躍することになった。

1910年冬、中国満州（現在の東北部）において極めて致死性の高い（致死率99.9%）伝染病が発生した。当初ハルビンを中心に発生した伝染病は、その後瞬く間に満州全体に広がり、満州とモンゴルで約6万人が犠牲になった。

この事態を重く見た清朝政府は、伍連徳をハルビンに派遣し、事態の調査と対応に当たらせることとした。ハルビンに到着した伍連徳は、中国人と結婚した日本人女性が伝染病で危篤であるとの情報を得て、その自宅に急行した。女性は亡くなったが、伍連徳は伝染病の正体を調べるため当時中国では禁止されていた死体解剖を行い、血管、心臓、肺葉などから検体を抽出し顕微鏡で観察した結果、この伝染病がペストであることを同定した。これは中国で最初に記録された病理解剖であった。

さらに、伍連徳は他の症例などを調査し、今回のペストはネズミやノミを介するペストではなく、飛沫により人から人へ感染する「肺ペスト」であることを突き止めた。飛沫感染による肺ペストと断定した伍連徳は、当時の満州でも入手可能であったガーゼを使用して厚手で簡単な縫製マスクを設計し、医療関係者や住民にその装着を勧めた。これは後に「ウー（伍）のマスク」と呼ばれ、現在のN-95マスクの原型となった。伍連徳は、同じく伝染病の調査と治療に当たっていたフランス人医師ジェラルド・メズニーに対し、このマスクの着用を勧めた。しかしメズニーは、伍連徳が年齢的にも若くかつ中国人であったことから、肺ペストであるとの伍連徳の主張を信じなかった。その後、顔を覆わず治療に当たっていたメズニーはペストに罹患し、数日のうちに死亡した。この話が広まると、医療関係者だけでなく住民の間にもマスク着用が広がった。

肺ペストに罹患し亡くなった人々の遺体の多くは路頭に放置されており、これにより他の人々に伝染する可能性があった。当時は火葬の習慣が一般的ではなかったため、伍連徳は清朝政府に働きかけ、清朝政府から火葬の命令を出させることに成功した。このような伍連徳の努力が実り、翌1911年3月には肺ペストによる死者はゼロとなった。

このペスト終息を喜んだ清朝政府は、伍連徳に国際会議の開催を命じた。終息直後の1911年4月、満州の奉天（現在の遼寧省瀋陽）において、「奉天万国ペスト研究会」が開催され、伍連徳は同研究会の議長として会議を取り仕切った。主要国からペストや他の伝染病の専門家が出席し、日本からも北里柴三郎が参加している。また伍連徳は、このペストとの戦いを英語による論文にまとめ、ロンドンの学会に送付し、同論文は同年8月にランセ

ット誌に掲載された。

辛亥革命後の中華民国での活躍

1911年末に発生した辛亥革命により清朝政府は倒れ中華民国となったが、伍連徳は引き続き中国に留まり伝染病対策に当たった。

1912年伍連徳は、満州の防疫管理所長に任命された。1919年から21年までの間、満州で流行したコレラの対処に当たった。対応には港湾での検疫が重要であったが、中国では1842年のアヘン戦争の敗北を受けた不平等条約である南京条約により、独自の検疫権が制限され諸外国による検疫への介入が常態化していた。伍連徳はこの状況を憂え、コレラが終熄した後も粘り強く政府に働きかけ、政府の外交交渉を促した。1930年に国際連盟の指導により漸く中国政府の港湾検疫権が確立し、当時海運の要であった上海に国家海港検疫管理局が設置され、初代の所長に伍連徳が就任した。

また伍連徳は、中国の医学研究の振興を図るため、「中華医学会」の創立に尽力し、1916年から1920年まで同学会の第2代会長を務めた。同学会の機関誌であり研究論文の発表の場である、「中華医学雑誌」の創刊にも尽力した。

さらに伍連徳は、1918年に「北京中央医院（現在の北京大学人民病院）」を、1926年に「ハルビン医学専門学校（現在のハルビン医科大学）」をそれぞれ設立し、中国の医療体制の確立に大きく貢献した。

日本軍の横暴に遭遇

1931年9月、満州事変の発端となる柳条湖事件が発生したが、伍連徳は日本軍に協力することを潔しとせず、ハルビンを去ることとした。ハルビンから大連に向かう途中、伍連徳は日本軍からスパイとして逮捕され、瀋陽に拘留された。伍連徳は中国系ではあるが、英国の植民地であるペナン生まれであったことから、英国領事が日本軍と交渉し、幸にも釈放されて上海の国家海港検疫管理局に移った。

1937年に日中戦争が始まると、上海も日本軍の占領するところとなった。このため、伍連徳はついに中国を離れ、故郷のマラヤに戻った。

しかし、マラヤも日本軍の横暴から免れられる地ではなかった。1941年12月に太平洋戦争が勃発し、翌年1月にはマラヤ全域が日本軍によって占領されてしまった。中国を離れてマラヤに帰っていた伍連徳は、公職には就かず小さなクリニックで医師として働いていたので、直ちに日本軍に逮捕されることはなかった。ところが伍連徳は1943年に、マラヤで活動していた左翼ゲリラに捕まり、身代金を払ってジャングルで開放された。これを日本軍が咎め、左翼ゲリラに資金を与えたとの嫌疑で伍連徳を拘束し、厳しく追及した。幸いにも、伍連徳の患者の中にマラヤ駐在の有力な日本人会社員がいて、彼の助力により無事釈放された。

死後にノーベル賞推薦が判明

第2次世界大戦が日本軍の敗戦で終了すると、マラヤは再び英国の直轄地に戻ったが、マレー系住民らの民族主義運動により1948年にマラヤ連邦が成立し、1957年に最終的に英国から独立した。伍連徳は、その後も生まれ故郷であるペナンで現役の医師として診察を続けたが、1960年に心臓麻痺で死去した。享年80歳であった。

伍連徳が亡くなって50年近くたった2007年に、ノーベル財団は1935年のノーベル生理学・医学賞の受賞候補者を公表したが、その中で伍連徳が推薦されていたことが判明した。推薦理由は、肺ペストに関する研究であった。残念ながら、最終的に1935年のノーベル生理学・医学賞を受賞したのは、ドイツの発生学者であるハンス・シュペーマンであった。受賞を逸したものの、中国系の科学者の推薦は初めてであった。

9 梅貽琦（1889年～1962年）清華大学の永遠の校長



梅貽琦 ©百度

生い立ちと教育

梅貽琦（梅貽琦）は1889年に、天津の塩屋の五男として生まれた。15歳となった1904年に、天津敬業学堂（後の南開中学）に入学した。梅貽琦は、4年後の1908年に同学堂を卒業し、北京の約140キロメートル南西に位置する保定にあった保定高等学校に入学した。

庚款留学生制度と清華学堂

梅貽琦が保定高等学校の生徒であった時に、中国の高等教育に大変革が生じた。庚款留

学生制度の発足である。

1900年の義和団事件の後、和平のために結ばれた北京議定書で、清朝は当時の国家予算の数倍にあたる賠償金（庚子賠款）の支払いを外国列強に約束させられた。「庚子」とは日本では「かのえね」と読み、この場合には西暦の1900年を指す。また「賠款」は、日本語の「賠償」に相当する。この賠償金の支払いが清朝政府を苦しめることになった。米国は、賠償金の金額見直しと一部の返還を決定し、その条件として、返還される賠償金を中国人学生の米国への留学費用に充てることを求めた。1909年米国で返還が正式決定されたのを受け、清朝政府は米国への留学生制度を設置した。この制度は、「庚子賠款」の「庚」と「款」を取って、「庚款留学生制度」と呼ばれることとなった。

また清朝政府は1911年、清朝の庭園であった清華園の敷地の一部に、庚款留学生の準備のための学校として「清華学堂」を設置した。その後辛亥革命が勃発し清朝が滅亡したため、清華学堂は一時的に閉鎖されたが、新政府により再開されるとともに1912年に名称を「清華学校」と改めた。現在の「清華大学」の前身である。



清華学堂（現清華大学）©百度

米国への留学と清華大学への奉職

梅貽琦は、庚款留学生制度の第一回目の学生募集に応じ、優秀な成績で合格した。1910年には、総勢47人の留学生の一人として米国へ渡り、マサチューセッツ州ウースターにあるウースター工科大学に入学し、電気工学を専攻した。4年後の1914年に、同大学を無事に卒業し電気工学の学士号を取得した。

大学を卒業した梅貽琦は、1915年に中国に戻り、清華学校の英語と幾何学の教員となった。梅貽琦は翌1916年に、清華学校の物理学教授に昇任し、その後1922年に物理学系の主任、1926年には教務長を兼務した。1928年に清華学校は清華大学となったが、梅貽琦は米国に渡り同大学の留学生の監督となった。1931年に滞米中の梅貽琦は清華大学の第3代

学長（中国では校長と呼ぶ）に任命され、帰国して同年 12 月に学長に正式に就任した。

清華大学の学長となった梅貽琦は、二つの考え方を徹底させた。一つ目は、「大学とは大
楼があることではなく大師がいることである」として、優れた教員の選抜と招聘を目指し
た。二つ目は、執行部の独善に陥ることのないように教授会、評議会と校務会議からなる大
学管理体制を構築した。この二つを徹底させたことにより、清華大学は北京大学と並び称
される大学に発展していった。

日中戦争時の西南連合大学

1937 年日中戦争が勃発し、日本軍は同年 7 月末までに北京と天津を占領した。北京市内
が日本軍に占領されたため、清華大学では落ち着いて授業をする状況でなくなり、北京大
学や天津にあった南開大学とともに 3 大学合同で、疎開のため内陸部にある湖南省長沙に
移動した。ところが日本軍は、1937 年 11 月に上海を、同年 12 月に南京を占領した。南京
が日本軍に占領されたことにより、湖南省長沙に移ってわずか 4 か月後にさらに大陸奥地
にある雲南省昆明に向けて移動し、1938 年 5 月、「国立西南連合大学」を雲南省昆明に開
校した。国立西南連合大学には校務委員会が置かれ、3 つの大学の学長がそれぞれ校務委員
会の主任となって校務全体を管理した。梅貽琦は清華大学を代表して、この国立西南連合
大学の校務委員会主任となっている。

1945 年に日本が太平洋戦争に敗北すると、梅貽琦は直ちに大学を北京に戻す準備を開始
したが、その後国民党と中国共産党との内戦が起こった。1948 年末に共産党が北京を占領
したことにより、梅貽琦は国民党の飛行機で南下した。さらに 1950 年に米国に渡り、ニュ
ーヨークのマンハッタンにある華米協進社の常務理事として勤務した。

台湾の国立清華大学設立

米国アイゼンハワー大統領は、1953 年末にニューヨークで開催された国際連合総会で、
原子力の平和利用に関する演説を行った。これにより米国の関係国・地域への原子力資材
供与を伴う原子力協力が開始され、台湾は日本などとともその恩恵に浴することになっ
た。1955 年に台湾と米国との間で原子力協力協定が締結され、台湾に原子炉が米国から供
与されることを受け、原子力研究の受け皿として新たな機関の設立が急務となった。米国
にいた梅貽琦は台湾に渡り、新竹市に原子科学研究科（大学院）を有する「国立清華大学」
を設立するために尽力し、初代の学長に就任した。さらに 1958 年、梅貽琦は台湾政府の教
育部長に任命され、学長を兼務しつつ台湾の教育全般の舵取りを行った。

1962 年 5 月、梅貽琦は台北市にある国立台湾大学附属病院で亡くなった。72 歳であっ
た。遺骸は国立清華大学のキャンパスに埋葬され、その墓の名前は「梅園」と呼ばれてい
る。

国立清華大学はその後順調に発展し、1962 年に数学研究科を設立し、さらに 1964 年に

は学部学生を受け入れるなどにより拡大し、現在、国立清華大学は人文系の学科をも有する総合大学となっている。中国大陸および台湾での清華大学への貢献（大陸で 1931 年～1948 年の 17 年間、台湾で 1955 年～1962 年の 7 年間）に鑑み、梅貽琦は「清華大学の永遠の校長（学長）」と呼ばれている。